



待降節第2主日 (マルコ 1:1-8)

洗礼者ヨハネの証に倣って生きる

待降節第2主日は、「洗礼者ヨハネ」と覚えたらほぼ間違いありません。同じような主日は、復活節第二主日「神のいつくしみの主日」です。これは、「トマス」と覚えたら間違いありません。洗礼者ヨハネは神から「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう」と言われた人物です。もし今の時代にも、「あなたよりも先に使者を遣わし、あなたの道を準備させる」そんな人が生きていれば、神の言葉は今の時代にも生きていくことになります。

先週だったか、典礼暦の仕組みを小学生の子供達と学んでいて、クリスマス準備のために「待降節」という期間があって、この「待降節」から教会の暦（典礼暦）は始まるのですよと説明していましたが、ホワイトボードにそれを説明書きしていたのですが、どうしたことか「クリスマス」を「クリスママ」と書いていました。

まるで教育評論家の「尾木先生が」「尾木ママ」と呼ばれているように、タレントのクリス松村さんが「クリスママ」になった。私にはそんなことを連想させました。せつかくなので楽しんじゃえということで、クリス松村さんを意識しながら「あらやだ！クリスマスをクリスママと書いちゃったのね。どうしましょ」と言ったら、子供達にはほとんど受けませんでした。クリス松村を知らなかったのか、クリスママそのものが面白くなかったのか、残念です。

さて、洗礼者ヨハネが人々に伝えたメッセージの中心は、「わたしよりも優れた方が、後から来られる」（1・7）ということでした。自分自身に取り組んできた悔い改めの呼びかけは、十分称賛に値する働きでした。けれども自分の働きを決してひけらかすことなく、「わたしよりも優れた方」を素直に認め、その方に席を譲ることを躊躇しませんでした。

私たちはどうでしょうか。毎日の生活、毎日の取り組みの中で「わたしよりも優れた方」を認めているでしょうか。具体的に誰かをイメージしなくても構いませんが、「わたしよりも優れた方」を意識している人は、自分自身のわざをひけらかすことなく、謙虚になれる人です。

本当は、評価されて当然の働きをしてきたのですが、それを鼻にかけない。洗礼者ヨハネの姿を学ぶ人は、常にこのように自分に謙虚さを失わない人です。自分を持ち上げないことで、かえって自分の価値を高める生き方です。

私たち司祭は、ともすると自分のしてきたことを鼻にかけがちです。自分がいる間にこれこれのことをしたとか、自分が来るまでは誰も成し遂げられなかったことを、私だけは成し遂げたとかです。しかもその場にいる人にだけでなく、次に赴任した場所でも過去の働きを自慢して回る。そんな危険が大いにあります。

けれどもそんなことをしていたら、現代に洗礼者ヨハネはいなくな

ってしまいます。洗礼者ヨハネのように、常に「わたしよりも優れた方が、後から来られる」と言える人でなければ、イエス・キリストを告げ知らせる働きは価値が下がってしまうのです。喜んで、後から来られる方に席を譲れる。その覚悟で毎日自分の務めを果たさなければ、教会の中でよりよい働きはできないのです。

自分の働きを鼻にかけず、自分が残した実績も躊躇せず次の人に譲ることができる。その覚悟でなければ、どうして教会の中で良い働きができるでしょうか。もし私たち一人ひとりの働きが、洗礼者ヨハネのような潔い働きであれば、今このコロナ禍の中でもイエス・キリストは誰にでも分かりやすく伝わるでしょう。

あなたの働きを通して、「この人は遣わしてくださった方を証している。この方を遣わしてくださったイエス・キリストは本物だ」そのように理解することでしょう。さらに、遣わしてくださったイエス・キリストはもっと偉大な方だと理解するなら、立派に私たちは現代の洗礼者ヨハネの役割を果たしています。

待降節第3主日(ヨハネ 1:6-8,19-28)